

模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年12月16日)

授業者：〇〇

範囲：裁判の種類と人権

主な感想・代案

- 生徒と対話しながら授業を進めようとする教師役の姿勢が強く感じられた授業でした。劇なども取り込み、攻めの姿勢も示してくれたのがとても良かったです。
 - この授業では、導入で生徒の意表をはっきりと突きに行っています。それゆえに、そのリアクションがイマイチだと、少しスムーズさがちぐはぐになる。仮に、驚きを生むような授業展開にしたいのであれば、導入でもう一步、詳しい情報を示す必要があったかと思います。
- ⇒ 仮に私であれば、世界中で戦争放棄をうたっている国がどれくらいあるのかを貼り資料などで示します。例えば、侵略戦争を否認している国はいくつかありますし、(自衛以外の)軍隊の不保持を表明している国もいくつかあります。ただしそれも数は少ない。こういった事例を示したうえで、ベストテンに入りそうな国を選択肢から選ばせるような形式にして考えさせ、日本をなぜ入れたのかなどを生徒に聞く展開にします。ベスト10の順位を発表する際に少し盛り上がりのある教材の演出があると面白いかもしれません。- 他の人の感想コメントにも挙がっていましたが、今回の授業内容自体が論争的であることは間違いありません。そういった場合、この授業の最後に、生徒に何が言えてほしいのか、という点がとても重要になってくるかと思います。仮に〇〇君が、自衛隊のあり方について多面的多角的な視点から考察してほしいのだとすれば、それは感情論で単に戦争はよくないとか、戦争放棄は非現実的とか、そういう言う話ではなく、複数の視点からの意見とそれを根拠づける証拠を見たうえで、自分の意見を述べるようなプロセスが必要になると思います。そう考えた時、〇〇君の検証シートの最後の「理想となる生徒の解答例」の内容は、内容が薄すぎるように感じます。これは正反対から考えると、おそらく今回の授業で提示された情報だけだと、憲法改正に賛成か反対かを多面的多角的に意見を述べることは困難なのではないかと思う。

⇒ 例えば私であれば、このような論争的なテーマはディベート形式のような形にするかもしれません。両方の立場の主張に関連しそうなデータを両方の立場にあらかじめ配り、主張内容を構想する時間を与える。その際に、反論を出来るだけたくさん想像してもらって、準備をしてもらう。その上で、実際に討論してもらう。その上で、最後は、(討論の立場とは切り離して)自分の意見をまとめる時間を作る。その意見は、グループなどで合意形成をしない。こうすることで、生徒の価値観を尊重した形で、ある程度の揺さぶりを与えることが可能かなと思います。

【コラム】理論と実践の接点

アクティブラーニング旋風が世の中に吹き荒れる中、生徒が何かを提案したり、生徒が互いの意見を交換する授業が「対話的」であると考えられる傾向にあります。ですが、それは本当に自分の考えと向き合った結果の決断なのか？と問われると、多くの実践は他者との形式的な対話を優先し、自分自身の価値観を吟味する過程がおろそかになっている。そういう傾向もあるような気がします。例えば王子(2018)では、生徒は往々に社会問題の意思決定をする際に、「あらかじめ」意見が決まっていた、その後付けをしているに過ぎないということを論じています。問題はそのあらかじめ決まっている意見をどう吟味させるか。そこが重要になります。自分が優先した価値を吟味するためには、他の何を犠牲にしてそれを優先しているのか？自分が選んだ価値観は誰にとっての利益につながるのか？などを考えさせる必要があるように思います。

【参考文献】王子明紀「直感のバイアスの制御に着目した社会科意思決定学習法の開発」『社会科学研究』第89号, pp.13-24.